

福沢一太郎の米国留学と慶應義塾

小川 原 正 道

- 一、はしがき
- 二、幼少期の教育から米国留学まで
- 三、米国留学出発とオバリーリン大学
- 四、コーネル大学とイーストマン・ビジネス・カレッジ
- 五、留学の成果——キリスト教の「感化」と言論活動
- 六、むすびに代えて——慶應義塾社頭として

一、はしがき

福沢一太郎は、福沢諭吉（以下、福沢）の長男として、文久三年（一八六三）十月十二日に生まれた。初等教育は父母自ら授け、十歳頃から外国人教師に英語の手ほどきを受けさせて、慶應義塾本科を卒業した上で、一太郎は弟・捨次郎とともに米国に留学している。⁽¹⁾

捨次郎の留学については、すでに別稿⁽²⁾において論じたところであるが、彼はマサチューセッツ工科大学（MIT）で土木衛生工学、特に鉄道について学び、無事卒業している。帰国後はその知見を生かして山陽鉄道に勤め、

父の興した時事新報社を継承した。この二歳下の弟に比して、学問の面でも、性格の面でも、福沢を心配させたのが、一太郎であった。福沢は、一太郎は数学ができないことから、農学の実務を身につけるよう勧め、米国の社交的な雰囲気の中で、引っ込み思案な性格も改善することを期待した。一太郎自身、そうした父の期待にこたえて、コーネル大学で農学を学んだが、途中で退学した、とされてきたが、果たしていづ、どのようにして入学して、そこで何を学んだか、留学はどんな成果をもたらしたのか、といった点については、なお、十分にあきらかにされていない。

一太郎は帰国後、慶應義塾の教師を経て、小幡篤次郎の後を継いで慶應義塾社頭を約三十年の長きにわたって務め、一時は塾長も兼務することになる。没した際の『三田評論』には、当時の塾長・小泉信三や、前塾長の林毅陸など数多の関係者が哀悼の文を寄せ、例えば林は、一太郎と捨次郎は「兄弟にて父福沢大先生の一面づつを分けて受け継いだかの如くに思はれた」として、捨次郎は「活動的」「不羈豪放」であり、一太郎は「静思的」「端正温雅」で、「実に一太郎氏は純粹の学者肌の人であり、文学哲学宗教等に深き興味を有ち、之に関する書籍を読み耽ることを第一の楽みと爲し、若い頃塾の文科に於て、英文学の講義を受持たれたこともあり、本来は文学者と称すべきであろう」と評し、「文学と同時にサイヤンスに関するものを好み、理科的のことに理解が深かつたうやうである。此の点に於ても、大先生の一特色を連想せしむるものがある」と述べている。⁽⁵⁾

しかし、一太郎についてはまとまった研究は存在しておらず、その生涯については、近年、『三田評論』の「福沢諭吉をめぐる人々」のコーナーで小山太輝が、概略を述べているに過ぎない。⁽⁶⁾米國留学についても、かつて石河幹明が『福沢諭吉伝』第四卷第四十六編「家庭に於ける先生」の「二子の洋行」で、福沢の一太郎・捨次郎の留学に対する姿勢を描写し、富田正文が『考証 福沢諭吉』下の「二子と養子の洋行留学」においてその概要を記しているほか、『福沢諭吉書簡集』第四卷・第五卷の解題が、それぞれ両名宛の福沢書簡について解説し

ているが、最近でも金文京が兩名の留学に関連する福沢の漢詩に解説を加えている程度で、その詳細や成果についてはなお検討の余地が残されている。

こうした状況に鑑み、本稿では一太郎の米国留学について、福沢の一太郎・捨次郎宛書簡、および今回発見したコーネル大学関連資料などを用いながら、なるべく詳細にあきらかにするとともに、帰国後の慶應義塾の教師・塾長・社頭としての活動との関連についても、考察を試みるものである。

二、幼少期の教育から米国留学まで

福沢が明治九年（一八七六）に記した「福沢諭吉子女之伝」によれば、一太郎は「一と口に云へば涕弱き性質なり。又其涕弱きと共に氣質甚だ弱くして憶病^{マヤ}なるが如し。譬へば書を読み事を学ぶときにも、教師の語氣少しく厳に過ぎて面色を正しくする等のことあれば、忽ち之に憶^{マヤ}して涕を出し、実は既に解したる文をも弁解すること能はずして泣くこと多し」と述べており、一太郎は性格的にかなり臆病だったようである。これに対して捨次郎は、「一太郎の成長は晚く、捨次郎は早くして、兄弟の年齢凡二年の差あれども、心身の働は正しく同様なるが如し」であり、学問も明治三年から同時にはじめた。一二三、いろはからはじまって父母から教えを受け、五年からは「カロザス」夫人、および「グードマン」という慶應義塾の外国人教師⁽¹¹⁾から、英語の手ほどきを受けた。七年からは「ショー」という英国人のもとで英語や数学、地理などを学び、九年からは万国史や文典などを習い、自宅でも父から和漢学、日本外史、十八史略、などを教えてもらった。⁽¹²⁾この間、四年には『ひゞのをしへ』を兩名に与え、「うそをつくべからず」「ものをひらふべからず」「父母にきかずしてものをもらふべからず」「ごうじょうをはるべからず」「兄弟けんくわかたくむよふ」「人のうはさはかたく無用」「ひとのものをうらやむべか

らず」などと論している⁽¹⁴⁾。

『ひゞのをしへ』については、一太郎自身による回想がある。明治三十九年一月に『少年』に寄せた「ひゞのをしへ」掲載に就て」のなかで一太郎は、「此『ひゞのをしえ』は、今から三十五年の大昔、私と弟捨次郎が、マダ泥いたづらをしたり、蟬を追ツかけ廻して居た、子供の時分の或日の事です。お土産であつたか何だか、よく覚えませんが、如何か云うことで私共兄弟は、父から加賀半紙を幾帖づゝか貰ひました。……毎朝何か徳義に関する話、又は手近の智識の事を書きましたので、我々は朝起きて御飯を食べて、それから父の書斎の机の前に座を並べ、今日は何を書いて呉れるであろうと、楽みそうに文章の出来を待つて居た」と述べている⁽¹⁵⁾。

さて、先述のような懸念が一太郎にあつたため、福沢は明治十三年八月三日、日常の心得書を一太郎に与えている。そこでは、「活発磊落、人ニ交ルノミナラズ、進テ人ニ近接シテ、殆ド自他ノ差別ナキガ如キ其際ニ、一片ノ律儀正直深切ノ本心ヲ失ハザル事」として、積極的に人と交わるよう求め、さらに「汝ノ後來ヲ案ズルニ、人ニ交ル事ノ拙ニシテ、自カラ不平ヲ抱キ又随テ人ニ不平ヲ抱カシムルコト多カル可シト懸念唯此事ナリ。謹デ忘レ、勿レ」と念を押している。よほど引つ込み思案な一太郎の性格が心配だったのである⁽¹⁶⁾。

その後、東京大学予備門に学ぶものの、健康を害して断念し、明治十五年七月に慶應義塾本科を卒業した⁽¹⁷⁾。その上で、一太郎と捨次郎は米国に留学することとなった。福沢としては、国内での英学修行ののち、洋行するというのは、自らの人生経験を踏まえた上での、子どもたちへの期待の表れだったのである。明治十六年六月十日、出発の二日前に、福沢は両名に宛てて、留学の心得書を示している。そこでは、「執業中、日本ニ如何ナル事変ヲ生ズルモ、此方ヨリ父母ノ命ヲ得ルマデハ、帰国スルニ及バズ。父母ノ病氣ト聞クモ、狼狽シテ帰ル勿レ」と覚悟を求め、「一太郎ハ農学ト方向ヲ定メタル上ハ、専ラ其業ヲ修メ、且農学ノ理論ヨリハ實際ノ事ニ力ヲ用ヒ、帰国ノ後、直ニ実用ニ適スル様心掛可申事」と一太郎には農学実務の習得を求めて、「捨次郎ハ物理学

ノ一科ニ志シ、或ハ電気学ナド如何ト思ヘドモ、其辺ハ本人ノ見込ニ任スル事」と捨次郎には物理学の中の一科、電気学などを修めるよう述べつつ、具体的な選択は本人に任せている。そして、「兩人共、学問ノ上達ハ第二ノ事トシテ、苟モ身体ノ健康ヲ傷フ可ラズ」と健康を第一とするよう示しているが、一太郎の性格についてはやはり心配だったようで、「氣力ノ弱キ」ことを指摘しつつ、学問の障害になるとして禁酒を命じている。⁽¹⁸⁾

三、米国留学出発とオバーリン大学

一太郎と捨次郎が横浜港を發つたのは、明治十六年六月十二日のことである。⁽¹⁹⁾これに先立ち、森村組ニューヨーク支店長の村井保固に宛てて、福沢は五月十七日付で書簡を送り、「兩人共御随行相願度奉存候間、宜布奉願候」と同行するよう依頼した。⁽²⁰⁾二十五日には駐米公使の寺島宗則に宛て、「兄の方は数の考に乏しく、且本人の志願も有之義に付農学被^マ致度、弟の方は随分学才も相応なる者の様に被^レ存候に付、何にても一課の専門物理学と申中に、小生の考には、一通は出来の上は、エレキトル学専修為^レ致度様存じ候」として一太郎は数学に弱く本人の志望もあるので農学を、捨次郎は学才があるため専門学を、と期待して、「着の上は学問上の義御心添御指図相願度」と指導を頼んだ。⁽²¹⁾先述の心得書の背景には、こうした本人の性格や志望、学才に対する福沢なりの判断があったことがわかる。

福沢は、兩名の留学に際して、「餞二子洋行」と題する次の漢詩を詠んでいる。

努力太郎兼次郎 努力せよ太郎兼ねて次郎。

雙々伸翼任高翔 双々翼を伸べて高く翔るに任せよ。

一言猶是賤行意 一言猶お是れ賤行の意、

自国自身唯莫忘 自国と自身を唯だ忘る莫かれ

両名が努力して翼を広げ、高く飛んでいくこと、そして、自国と自身のことを忘れないよう、論している。⁽²²⁾
さらに両名が太平洋上にあるとき、「憶二子航米国在太平洋」と題して次のように漢詩を詠んだ。

月色水聲遶夢邊 月色水声、夢辺を遶る。

起看窓外夜凄然 起きて窓外を看れば夜は凄然。

煙波萬里孤舟裡 煙波萬里、孤舟の裡、

二子今宵眠不眠 二子は今宵眠るや眠らざるや

両名が船上から眺める月の色や、聞こえてくる水の声が自分の夢枕をめぐるとして、起きて外をみると夜はひっそりとしており、太平洋の船のなかで両名は眠っているだろうか、どうか。案じている福沢の様子がみてとれよう。⁽²³⁾

出発から一週間後、福沢ははやくも両名に宛てて書簡を送り、「米国着之上ハ……不都合ハなき事ト存候得共、金之事ハ往々間違を生するものなるゆゑ、何月何日何之為ニ森村組之何人ハ何程の金を請取たりとの事ハ、厘毫も間違なき様ニ、此方へ報道可被致。且又、兼申含候通り、何等之事情あるも森村組之外ハ何人へも金を借用すること不相成」と、資金については森村組に一任していることを強調している。その上で、「学問ハ決して速成を要せず。急進して体を損するが如きハ以之外之事なり」と健康に気をつけるよう釘を刺した。⁽²⁴⁾同日には村井に⁽²⁵⁾対し、「子供両人之学費ハ、其御店ハ御渡し被下度奉願候」と森村組に学資支給を一任する旨を伝えている。七

月四日にも、福沢は両名に「無事安着の一報を待つ斗り」として、「学問方も健康専一なり。呉々も忘るへからざるなり」と繰り返した。⁽²⁶⁾同日、森村豊と村井に、「着の上も万事御添心相願ふのみ」と書き送っている。⁽²⁷⁾

六月二十六日の両名の米国到着後も、明治十六年七月十九日付の書簡で福沢は、「初めての夏、如何して凌候哉、是のみ案しられ候」と、とにかく健康を心配している。⁽²⁸⁾これは心得書以来、留学中一貫して福沢が強調した点であった。八月十七日、福沢は両名に宛てて、九月から学校に入るだろうが、「学問之本科を務むべきは勿論なれ共、尚心掛ケ度ハ英語之読ミ書きなり。英語を自由自在ニ語り、英文を自由自在ニ書クハ、目下必要之一芸と云ふへし」と英語習得の重要性を説いた。⁽³⁰⁾八月二十七日の両名宛福沢書簡からは、両名がニューヨークからワシントンDCに赴き、現地駐在の外交官・鮫島武之助などと相談の上、オハイオ州に「就学之場所」が決まったことがわかる。ここでも、「一太郎ハ農学ニ志し候様致度、ハイサイヤンスよりもブラクチカル之一芸緊要と存候」と一太郎に農学実務習得の重要性を説き、さらに、「一太郎ハ性質人に交るの機転に乏しく、動もすれハ引込思案ニ出候間、能々心掛米国人之気象ニ倣ひ、朝夕アミエブルに他人に交り候様、意を用ひて習、遂二者性と為り、生涯ハピネス之源を深くする事専一なり」と、米国人の性格にならって、これまで福沢を心配させてきた、一太郎の引つ込み思案な性格を改めるよう勧告した。捨次郎については、「マセマチック、メカニック云々との事なれ共、尚事情を察し而自ら決する所可有之旨、至極之事に存候」と信頼を寄せている。⁽³¹⁾なお、両名は森村組から、日本から届いた書簡や『時事新報』などを受け取っていた。⁽³²⁾

九月七日付の両名宛福沢書簡によると、鮫島に伴われた両名は、オハイオ州のオバーリンに到着し、「ニウトン宅氏」に止宿して英語の学習に取り組むこととなった。「ヲバーリン之学校に者農学之課無之よし。故に一太郎は来年ニもならバ他処へ転すへしとの義、何れ左様可相成」として、現地の学校では農学が学べないため、一太郎は来年にも引越すという見込みも伝えられている。⁽³³⁾同月二十一日付両名宛福沢書簡では、九月十日から

「ヲバーリン之学校」がはじまったが、農学課程がないので一太郎がどうするつもりなのか、問い合わせている。⁽³⁴⁾十月十七日付の両名宛福沢書簡では、一太郎の記した「鉄道論」を評価して『時事新報』に掲載したこと、捨次郎の英文が優れていること、などを伝えており、十月二十日付の D・B・シモンズ宛の書簡では、福沢は「兄ノ方ハ全ク文才ナキニ非サレトモ、数学ノ考ニ乏シキガ故ニ農学ニ従事セシメ、殊ニ其实际ヲ学ハシメント欲スルナリ。弟ノ方ハ何科ニテモ、一科学ヲ学ハシメント欲ス」と、やはり一太郎より捨次郎を評価し、数学が苦手な一太郎には農学の実務を学ばせたいとしている。また福沢は、「ドクトル・ヨングハンスムモ、君ト共ニ賤息教育ノ事ニ付御尽力可被下旨、厚情不堪感謝、宜布御致意奉願候」と記しており、シモンズとともに、T・H・ヨングハンスも両名の教育について尽力していたことがわかる。⁽³⁷⁾以後、シモンズとヨングハンスは、両名の留学の世話を焼いていくことになる。⁽³⁸⁾

十一月二十四日付の両名宛福沢書簡では、「兩人共無事勉強之趣安心いたし候」と述べつつ、「拙者ハ貴様達を愚人と思はず。唯壮年之事なれば失策もあらんかと、老婆心中懸念する而已」として、「失策」をしないよう兄弟で協力するよう求めた。また、帰国後には「役人」にでも「農工」にでも「学校教師」にでもなればいいが、『時事新報』が拡大していくならば、その事業を譲りたいとも吐露し、「何に致せ身体之健康ハ処世之資本なり」と繰り返し健康の重要性を説いている。⁽³⁹⁾オバーリンの学校について両名は不満を漏らしたらしく、十二月四日付の両名宛福沢書簡は、「オーバリン学則不満足之よし、縷々之事情ハ能ク相分候……困難之事情ニ際したらバ、郷国父之命なりとて、推して通行可被致」と、学校を変えることも提案している。さらに、箕作佳吉が手紙で、大学で農学を学ぶよう記してきたとした上で、「農学ハ唯くプラクチスニ而沢山なり。一太郎ハマセマチック不得手之義、無理ニ難き業を勤るにも不及」と、数学が苦手な一太郎に、やはり農学の実務を勧めた。⁽⁴⁰⁾ただ、十二月二十二日付の両名宛て書簡で福沢は、一太郎に農学、捨次郎に何かの実学、と提案したのは「唯拙者之スベ

「キュレーション而已」として、一太郎も農学に限らず、何か「氣に適ひ候課もあらば勝手ニ可致候」としている⁽⁴¹⁾。

この「オバーリン之学校」とは、オバーリン大学のこと⁽⁴²⁾で、明治十六年に刊行された『Catalogue of the Officers and Students of Oberlin College, for the College Year 1883-4』を確認すると、「Department of Preparatory Instruction」に属する「English School」の「Student」欄に「Ichitaro Fukuzawa, Tokio, Japan」や「Sutejiro Fukuzawa, Tokio, Japan」の名が記載されている⁽⁴³⁾。「English School」は、同大学の「Department of Philosophy and the Arts」の文学コースに進む学生のために設計されており、英語やラテン語、代数学や合衆国史などを教えていた⁽⁴⁴⁾。ここでの修学が両名にとっても、また福沢にとっても、不満だったわけである。当時の同大学には、「Department of Preparatory Instruction」「Department of Philosophy and the Arts」のほか、「Department of Theology」「Conservatory of Music」が設置されていたが、農学部はなかった⁽⁴⁵⁾。

かくして、明治十七年一月四日付の両名宛福沢書簡では、両名はいよいよオバーリンを去ることになったらしく、「オバーリンをバ辞して、ニウエングランド地方ニ赴くべし」と伝え、捨次郎には鉄道事業を勧めたが、これも「決して心ニ関するニ足らず」と、あくまで好きな学科を選ぶよう求めた⁽⁴⁶⁾。同月十六日付両名宛福沢書簡によると、一太郎は農学のためにミシガンに行くよう、ニュートンから助言があったようだが、シモンズのアドバイスを聞いてから判断するように促している。ここでも、「一太郎之農学と申ハ、数学不得手兮思付候事なれば、必ずしも穀物を作る農業而已ニ限らず。或ハ樹木菓木^マ之事、牧畜之事等、其他何事ニ寄らず余り数学を要せずして、帰国之後一家之生計を立るニ便なるものあらば、農業外之事ニ而も執行可被致」と述べつつ、日本で土地を買って一太郎と一緒に農業牧畜に勤しむのも面白い、「一太郎ハ農業を以て立身之本と為し、英文ニ巧を得て学校之教師を余業ニしたらば、或ハ前途之得策ならん」と、希望を語っている⁽⁴⁷⁾。一太郎としては、自由にしたいと言われつつも、ここまで数学が苦手だから農学を、将来は農業で生計を、と言われれば、それ以外の選択肢

はとりにくかったにちがいない。

一月十四日付の両名からの手紙が福沢の元に届いたらしく、それへの返書が二月二十二日付で出されているが、そこではニューヨーク州ポーキプシーに到着した後、シモンズと相談の上で、「唯今ハブレパレーション。其上ニ而一太郎ハコルネル、捨次郎ハッロイ歟マサッチセツトへ参るべきよし。如何様ニ而も勝手に任す」として、一太郎には農学、捨次郎には土木工学を専攻するよう勧めている。⁽⁴⁸⁾ここで、一太郎がコーネル大学で農学を、捨次郎がニューヨーク州トロイかマサチューセツツ州で土木工学を、それぞれ専攻することが、事実上決まったといえよう。トロイには、先述の箕作が学んだレンセラー工科大学があり、捨次郎の進路は同大学かMITに絞られた形であつた。

かくして、一太郎はポーキプシーに滞在して、⁽⁴⁹⁾コーネル大学への入学に向けて準備を進め、四月二十四日付の一太郎宛書簡で福沢は、「コルネル入校之義、シモンズ氏ハ正則課ニ就くへしとの説ニ而、其予備ニ忙はしく、就中数学ハ少々困るよし、拙者も其情を知らざるニ非ず。……一太郎ハ必しも大学校之正則を踏ざるも可なり」と、数学が苦手な一太郎に対し、大学の正規コースへの入学にこだわらなくてもよいとの姿勢を示している。⁽⁵⁰⁾先述の通り、福沢は子ども達の健康を何より重視しており、一太郎が体調を崩したとの書簡が届いた際には、五月十二日、「誠ニ心配不堪……幾重にも注意被致度呉々も所祈候」と一太郎に書き送っている。⁽⁵¹⁾六月十六日からコーネル大学の入学試験があると聞いた福沢は、七月七日付の一太郎宛書簡で、やはり数学が苦手なので「本課」にこだわる必要はなく、農学に関わる「一芸」を身につけてほしいと述べた。⁽⁵²⁾この試験で一太郎は合格しなかったようで、八月十五日に福沢は一太郎に、「穀物を作るよりも樹木を植る方利益なりとハ違はざる義ト被存候」と、果樹栽培を専攻するよう期待しているが、一太郎は家畜を専門にしたいと述べたらしく、福沢は九月八日付の一太郎宛書簡で「好む所こそ得意なれ」と応じている。⁽⁵⁴⁾

四、コーネル大学とイーストマン・ビジネス・カレッジ

明治十七年九月十七日、一太郎はコーネル大学の正規コースに合格した。十一月三日、福沢はシモンズに宛てて「一太郎入校ノ試験相済候ニ付、慇々コルネル大学へ御出張被下候由、御深切ノ段深ク御礼申上候。授同人義モ入校試験登第シタル由、是モ兼テ御添心ヲ煩ハシタル結果、小生ニ於テ満足ノミナラズ、貴下ニ向テ多謝スル所ナリ」と礼を述べている。正規課程への入学は困難と思われていただけに、福沢は実に嬉しかったのであろう。ただ、一太郎の性格が「胆力ニ乏シク、人ニ接スルニモ、シャイネスノ弊アリ」であり、数学に難儀してホームシックや病気になったりはしないかと心配している。「同人ガ四年ノ正課ニ入ルハ甚タ満足ニシテ、甚タ悦フ所」ではあるが、健康を害することだけが懸念材料であつた。⁽⁵⁵⁾翌日、福沢は一太郎に対して書簡を送り、「九月廿九日書状……同月十七日、入校試験首尾能く登第したるよし、誠に目出度次第。此事は貴様の此意外ニ出たるよし」と述べ、自分も自己評価が低い傾向があるが、一太郎も同様であろう、今後は「自から巧なりと信すれば、次第二巧ニ進むものなり」と激励し、できれば四年の正規コースを卒業して「卒業証書」を持ち帰ってほしい、ただ健康を害するようであれば「廃学するも可なり」と伝えている。⁽⁵⁶⁾

ここで、コーネル大学側の記録を確認しておこう。一八八四—八五年度の『The Cornell University Register』に収録されている学生名簿の「Freshman」の欄に「Fukuzawa, Ichitaro Tokyo, Japan, Agriculture」の記載がある。⁽⁵⁷⁾これにより、一太郎が正式にコーネル大学一年生として在学し、農学を専攻したことが確認できる。この当時の総学生数は五七三名、うち一年生は二三五名と、まだまだ大学は小規模であつた。⁽⁵⁸⁾この年度は、一太郎が合格した翌十八日に履修登録が行われ、十九日から授業がはじまっている。⁽⁵⁹⁾農学部のカリキュラムによると、秋・冬・春の三学期制で、学生はクラスにおける授業のほか、植物学、化学、獣医学実験室での実習や農場、家

畜小屋での実習が課され、週に二日、三時間のフィールド・ワークを実践して、動物に餌をやり、世話をするこ
 とになっていた。このほか、夏休みを利用した農場でのさまざまな実習もあったようである。⁽⁶⁰⁾こうした実習は主
 に二年生から課されたようであり、それが一太郎の修学のネックになることになる。

福沢書簡に返ろう。明治十七年十二月三十一日付の一太郎宛福沢書簡では、「四年之コールスニ而、此跡三年
 半なり」と述べている。⁽⁶¹⁾翌年三月十一日付の一太郎書簡に対する四月十四付の返信で、福沢は「先以て無事へ平
 安々心ニ存候」と述べていて、異変は感じられない。⁽⁶²⁾四月二十五日付一太郎宛書簡でも、「貴様試験も相済候よ
 し。勉強之為ニ痛所もなき段、欣喜不堪」と安心した様子をみせている。⁽⁶³⁾七月二十二日付の俣野景次宛書簡で
 は、「兄はニウオルク州イサカ、弟はボーストンに居、先づ今日まで無病にて執行、文通も有之候」と述べてお
 り、⁽⁶⁴⁾八月四日付の捨次郎書簡への十月一日付返信でも、「兄弟共平安のよし」としていて、兄弟共元気だったよ
 うである。⁽⁶⁵⁾一太郎に一年遅れてコーネル大学に入学した岩崎清七は、一太郎は留学前からダーウィン、スペン
 サー、ミル、ゲーテ、シラーなどを読破しており、留学中も片時も書物を手放さず、「毎日の運動散策に於ても
 書物やの店頭に入つて新刊書を買ふのが、唯一無二の楽しみであつた」と証言している。⁽⁶⁶⁾

一太郎が退学の意向を漏らしはじめたのは、この後のことのように、十月二十二日付一太郎宛書簡で福沢は、
 「シモンズ氏今之来状二者、貴様事、今回ボーキプシー之商法学校ニ入れば、凡そ六ヶ月に卒業すべし……貴様
 が商法学校を卒業するも、これを日本ニ土産ニして一事業を起すの資とするニ足らず……農業之實際も難シ、商
 売も同じく易からず。然ハ即ち文学士として世ニ立たんか、是亦容易なる事ニあらず。併シ貴様之天稟、文学に
 適したる者として考れば、尚所望之点甚タ多し」として、⁽⁶⁷⁾ボーキプシーの商法学校を卒業したあとに、さらに文
 学の学校に入つて勉強を続けることを提案している。「農業之實際も難シ」とあるから、一太郎自身、農業実務
 に限界を感じていたがうかがえる。

実際、岩崎は、一太郎の退学の経緯について、次のように証言している。

コーネル大学に入り最初の一ケ年は所謂一年生で普通教育程度の専門に入る可き準備教育に過ぎなかつたが、農科の第二年生となつては書物の勉強を離れて米國式に實地に仕事を為さなければならなくなつた。即ち野原に出て小麦の刈取機械を操縦したり、農馬車に乗つて野原の開拓をやつたり、種蒔きをしたり、又内に在つては牝牛から牛乳を搾つたり、又牛乳からバターを製造する事を実修したり、又羊毛を刈取るため鋏を以て羊の首ツ玉を押へ付けながら羊の毛を切り取る稽古をしたり、恰で農家の作男同様の仕事をする事になつたので、一太郎氏は馬鹿らしくつて堪らなくなつた。⁽⁶⁸⁾

アメリカの教育は御承知の通り、農学に入ると殆ど全部バタを造る、小麦を作る、ミルの經濟書、スペンサーの哲学の論理を研究した人がボロ着物を着て馬の尻を叩いて馬車に乗つて種を蒔いたり何かする役廻りになつた。そこで私は「一太郎さん、どうだい、やつて行けるかい」と言つたら、「もう、これで沢山だ」と言つて居られたが、二年でとう／＼止められ読書三昧の生活に入つて居られた。⁽⁶⁹⁾

かくして一太郎は、コーネル大学を退学したわけである。實際、『The Cornell University Resister』の一八八五—一八六年度版、一八八六—一八七年度版、一八八七—一八八年度版には、一太郎の名前は⁽⁷⁰⁾ない。二年年度の途中には退学したことがうかがえよう。コーネル大学がニューヨーク州イサカに開設されてから十周年を記念して刊行された『The Ten-Year Book of Cornell University 1868-1888』⁽⁷¹⁾に、Fukuzawa, Ichitaro, 1884-1885, 3, Ag; Tokio, Japan」と記されている。

十一月十日付の一太郎宛書簡で福沢は、「イーストマン卒業之上、再びコルネルに歸りて、リテラチュール之

課を取るも宜しからん」と、ポーキプシーにあったイーストマン・ビジネス・カレッジを卒業後、コーネル大学に戻って文学を修めるよう求めている。⁽⁷²⁾この時点で、一太郎がコーネルを去って、イーストマン・ビジネス・カレッジに移っていたことが理解されよう。⁽⁷³⁾従来、一太郎は明治十九年春頃にコーネル大学を退学したとされてきたが、⁽⁷⁴⁾実際はそれより少し早かったものと考えられる。一年三ヶ月ほどの在学であった。なお、十二月一日付の一太郎宛書簡で福沢は、「イースマンコレージ之稽古ハ随分面倒なるよしなれども、この位之事は勉強可致存候」と述べ、⁽⁷⁵⁾明治十九年一月三十一日には一太郎に宛てて福沢は「寒氣之時節ポーキプシーハ如何哉」と尋ねている。⁽⁷⁶⁾

イーストマン・ビジネス・カレッジは昭和六年（一九三一）に閉校しており、同校の記録はポーキプシー公共図書館に所蔵されているが、現存している学生名簿や学生写真などに、一太郎の記録は残されていない。⁽⁷⁷⁾短期間の在学であり、資料も完全なものではないから、現存資料から漏れているのであろう。ポール・バテセルが公開しているウェブ・サイト“America's Lost Colleges”によると、⁽⁷⁸⁾ビジネス実務を専攻するコースが設けられている同校にあって、外国人留学生は、英語の読み、書き、算数、文法、作文を学ぶコースを履修できたという。一太郎もこのコースを履修していたものと推測される。

四月九日付一太郎宛福沢書簡では、シモンズからの提案として、「プライベートティーチャルを雇ふて学ふ方可然との事に付、一二委任スル積り」と述べており、⁽⁷⁹⁾この頃には個人教授も受けるようになったことがうかがえる。捨次郎はMITで土木工学を学んでいたが、ポーキプシーを訪れることもあったようで、七月一日には両名宛書簡で福沢は、「今程ハ兄弟共ニ、ポーキプシーニ居る事ならん」として、英文の書籍を贈り届け、妹である俊と滝も「追々文明之流行、女子ニ而も一度ハ外国へ参る様致し度」として、「入費之高」を問い合わせた。⁽⁸⁰⁾しかし、イーストマン・ビジネス・カレッジも長続きせず、同月二日付の一太郎宛書簡への同月三十一日付返信で福沢は、

「シモンズ氏同意を以て、イーストマン校を引き、専ら文学を学ぶ様方向を転し候由、學業之義ハ兼而申入候通り、此方今深く細二指図致候義ハ出来不申、自分之好む所に従ふべし。文学甚だ良し、勉強被致度事に候得共、此文学ニも亦実と空と二様之別あり。拙者ハ実主義なり」として、退學して文学を学びたいという一太郎に、実用的な學問を身につけるよう苦言を呈した。⁽⁸¹⁾九月一日付の兩名宛書簡でも福沢は、「卒業証書之価ハさまで貴からず。何卒実地之英文英語勉強可然。夫れに而米國行之所得は沢山なり」と述べている。⁽⁸²⁾

その後、一太郎は學校に属することなく英文學、英語の勉強に取り組み、⁽⁸³⁾福沢も帰國後は慶應義塾で教師を務めることを期待するようになる。⁽⁸⁴⁾ただ、福沢はあくまで勉強に励むよう厳しく一太郎に伝えており、明治二十年七月十八日には、「貴様ハ尚尠ケ年在留して、二念なく學問勉強可致。一年を過ぎたらバ、捨次郎と同伴して歸國可然。此尠ケ年之間ハ、他事二心を寄する事不相成。尋常二留學生之事を努むべし。酒など用るハ學生之身にある間敷事なり。大酒禁制なり」と通告している。⁽⁸⁵⁾禁酒は心得書以來の福沢の方針であったが、自分の意向通り、MITで土木工學を修めている捨次郎に比して、もともと學問的にも性格的にも頼りなかった一太郎が就學もままならない事態に、福沢としても苛立っていたのであろう。⁽⁸⁶⁾卒業証書はいらないといいつつ、翌年一月十六日付の一太郎宛書簡では、「貴様二者學校之卒業証書なし。実ハ小兒之戲、なくても不苦、拙者者平氣なれとも、俗世界之俗情ハ左様ニモ參らずと存候。今日内々ドクトルシモンズニ談し、ポーキプシーのプライウエートチャーチャーの証書を貰ふか、又は或る學校ニ而唯文學文ヶ証書を申受るか、如何様ニか致し度……貴様も其心得ニ而、得らるべきものならバ、努めて之を求るの工夫專一と存候」と、何らかの証書は得られないものかと説得している。⁽⁸⁷⁾しかし一太郎の二月十三日付書簡への三月二十三日付福沢の返信によると、「學業上之証書ニ而もあらバ都合宜しからん云々申遣候処、右は不同意のよし、拙者ニ於而も、さまで熱心する訳けニもあらず」⁽⁸⁸⁾とこれも結局実現しなかった。

この間、前年十月十三日の一太郎宛福沢書簡では、ユニテリアン宣教師の A・M・ナップが来日にあたって「日本之言語風俗を取調度二付、貴様が其家へ参るべきよし、是は面白き事なり。何卒相談之出来候様致度所祈候」と書き送り、十一月九日付の一太郎宛書簡によると、一太郎がナップの家に滞在し、「日本之事情、言語之事共話し」たことがわかる。⁽⁹⁰⁾ ナップはその後來日し、慶應義塾大学の教師をハーバード大学から招聘するにあたり、仲介役を務めることになるため、「一太郎は大学部設置の隠れたミッド・マンになっていた」とも評される。⁽⁹¹⁾

その後、一太郎は MIT を卒業した捨次郎とともにヨーロッパを回って明治二十一年十一月二日に帰国した。⁽⁹²⁾ 帰国した兩名を歓迎して、福沢は十一月二十五日、慶應義塾構内で園遊会を開いている。⁽⁹³⁾

福沢は兩名の帰国を受けて、「明治二十一年十月二子帰朝」と題する漢詩を詠んだ。

雛燕歸巢面目眞　雛燕は巢に歸りて面目真なり。
 家山況又少風塵　家山況んや又た風塵少なし。
 歡迎共飲皆親舊　歡迎迎えて共に飲むは皆親旧、
 和氣滿堂冬似春　和氣堂に満ちて冬も春に似たり

帰国した兩名が成長し、古巣に戻って面目を新たにした。故郷では異国のような苦勞もないだろう。歓迎の宴で飲むのは皆旧友ばかりであり、和やかな空気が満ちて、季節は春のようだ、と福沢は喜んでいる。⁽⁹⁴⁾

また、福沢は横浜で兩名を迎え、帰宅して宴会を開き、その際に次のような漢詩を詠んでいる。

一別天涯六閱春　一たび別れてより天涯に六たび春を閲す。

相看恰是夢邪眞 相看れば恰かも是れ夢か真か。

九郎不識阿兄面 九郎は識らず阿兄の面、

却問佳賓何處人 却って問う佳賓は何処の人やと。

別れて以来、六年が過ぎている。帰国して対面すると夢か現実か、わからない。九郎（大四郎）は兄の顔がわからずに、このお客様はどこの人かと尋ねた。ここにも、やはり再会を喜ぶ福沢の気持ち（⁹⁵）が表れている。福沢は、明治二十二年一月七日付の小田部武宛書簡で、「当年ハ一太郎、捨次郎両人之帰宅、六年め家族打揃、賑々敷新年を迎へ候事ニ而歎居候」と記しているように、新年を喜んで迎えることができた。⁽⁹⁶⁾

五、留学の成果——キリスト教の「感化」と言論活動

先述の通り、一太郎は留学中、『時事新報』に寄稿していたが、署名入りの論説としては、明治二十年二月二十六日付の「日本商人の品位」および明治二十一年五月二十八日付の「耶蘇教に入る、か仏法を改良するか」が確認できる。前者は、「一太郎氏が目下米国紐育州のボーキプシーにて文学修行中その作文の課業に綴りたりとて送付せし英文を本社にて翻訳したるもの」で、「商人風情の者共は社会の最も下等なる人種として卑下」する日本に対し、「米国にては之と反対にて金錢は人の勤勉の所産にして人物の価値はその所有する金錢の多少」で決まるとして、「今の日本商人の地位を社会の上流に進め今後日本国をして商売を励ミ且つ之を貴重するの国柄となすこと国の務めに於て最も大切な事ならん」と説いたものである。⁽⁹⁷⁾

一方後者は、一太郎が米国で起草し、ボストンで発行されていた『クリスチャン・レジスター』紙に掲載され

た記事を翻訳して『時事新報』の論説としたものである。一太郎は、日本の宗教で「時勢」に応じたものはキリスト教が「改良」された仏教しかないとした上で、日本の仏教が「卑近」であり、「文明開化」に適さないとして、地獄を恐ろしく描いた絵などは「捏造」であり、こうした「地獄教の主義」を廃する必要を強調する。そして、「余の説は日本の仏法を改良せんとするよりハ寧ろ日本に耶蘇教を入るゝに若かず」という立場を示しているが、一太郎はこのキリスト教を「宗門に入れんよりは随喜親愛の心を以て勧化せる」もの、あるいは「有道の耶蘇教」と称している⁽⁹⁸⁾。土屋博政が指摘するように、これはユニテリアンを指しているのであろう⁽⁹⁹⁾。

実際、明治二十年十二月十九日付で福沢が一太郎に宛てた書簡では、「先便ユニテリアンを義塾へ云々之義二付一説之英文、塾員に示し候処、文章之巧なる二者皆々驚居の様子二而、拙者も窃ニ喜び候次第」と述べており、一太郎が慶應義塾にユニテリアンを広めようと提案していたことがわかる⁽¹⁰⁰⁾。福沢が評価したのは英語の文章だけではなくたようで、同じ「先便」について返信したとみられる同年十一月二十九日付の一太郎宛福沢書簡には、「義塾と宗教之関係、論し得て妙なり。差支もなき文面ゆゑ、塾員へも示す積りなり」と記されており、内容も評価した上で塾員に示したことが判明する⁽¹⁰¹⁾。

一太郎は留学中にキリスト教に改宗する意向も示しており、明治十九年七月三十一日付の一太郎宛福沢書簡には、「耶蘇宗ニ入るの意あるが如し。是亦決して禁する所ニあらず、勝手ニ可被致。酒色之不品行を慎むハ人生之一大事、宗教以て心を正し、推して今日之品行ニ及ぼす、甚以て宜しき事と存候」とあって、一太郎に任せる姿勢をとっていた⁽¹⁰²⁾。義弟の志立鉄次郎は、「兄は基督教の洗礼は受けられなかつたさうであるから、基督信徒と称すべきではないけれども、聖書を精読してその精神を会得せられたと承り、且若年に「シモンズ」氏等より受けられたる基督教の感化が兄の思想と人格とに大なる影響を及ぼした疑のないことである」と証言しており⁽¹⁰³⁾、一太郎が洗礼は受けなかったものの、聖書を精読し、シモンズなどからキリスト教の「感化」を受けていたことが

わかる。⁽¹⁰⁴⁾ こうした「感化」の結果、右のような論説を書くに及んだのであろう。⁽¹⁰⁵⁾

両名の帰国を前に、『時事新報』は明治二十一年九月十三日から四回にわたって、「帰朝記事 福沢一太郎氏英文の翻訳」と題する社説を掲載している。一太郎はここで、「某氏」の言葉を借りて、留学を振り返っている。渡米前に、米国の寺院に行く際にはフロック・コートを着ていくべきだと友人にいわれたが、実際には「寺には毎度参詣したれども未だ一度もフロック コートの必要に逢はず蓋し米国の寺院は衆生を入れて拒まずフロック コートの如きは耶蘇教に無縁のものなり」と、ここでもキリスト教会に好意的な感想を記している。一方で、「米国は真真正銘の金錢国なり生計に不足なき良家の子にして二十五錢の爲めに近隣の牧場に草を刈る者あり戸外に遊戯する小供に五錢を与ふれば走て町使の用を達す可し」と、米国の資本主義には冷ややかな姿勢を示した。一太郎は米国を発って英国に赴いたが、船中でキリスト教の牧師が「近世の文明開化は耶蘇教の賜にして恰も其子に異ならず」と語ったと記しているが、このあたりにも共鳴するところがあったのであろう。ロンドンではウェストミンスター寺院でマグナカルタの原文を見物し、「是れ英国自由の母にして米国独立の祖母とも名く可きものなり」と感銘を受け、英国を「自由政治国」と称している。米国でキリスト教の感化を受けた一太郎が、その旧宗主国たる英国に、文明開化や自由の起源をみて、感銘を受けたことが見受けられる。⁽¹⁰⁶⁾

明治二十三年に慶應義塾大学部が発足すると、一太郎は文学科で歴史などを教え、『時事新報』で社説を書いたこともあった。⁽¹⁰⁷⁾ 明治三十二年頃からは、積極的に『慶應義塾学報』に、論説や小説、演説筆記などを寄せるようになる。明治三十二年二月に、『慶應義塾学報』に掲載された「実学者の苦心談（慶應義塾学生諸君に告ぐ）」では、「現在勉学の其間は職業とて別にない訳唯だ健康を害せぬ限り一心不乱に読書勉強以て学問上の実知識⁽¹⁰⁸⁾ ポジチーフノレッジを貯へるが何より肝心で御います」と、自らの体験を踏まえて学生に呼びかけている。また、米国で文学を学んできただけあって、同年十二月には、「Atsumori, Prince of the Taira: A Japanese

Romance」と題する小説を『慶應義塾学報』に掲載している。⁽¹⁰⁹⁾この前年に福沢が脳溢血で倒れているから、父に代わる気持ちで、こうした文章を執筆したのであろう。実際、明治三十三年一月の『慶應義塾学報』には、「西洋文明の泉源」と題して、「是から後も私は父の考を取次して文章や演説を色々やる積りで御在ます」と、父の考えを取り次いで文章や演説に取り組む決意を示した上で、「此演説会は前に申す通り西洋文明の泉源であるから、是から益々四百一回の上を幾数倍にも進めると云ふ熱心を以て此西洋文明の清水を噴出せしめ日本社会の隅から隅に至るまでスツカリ大掃除をして西洋文明の氣風を國中至る所に充満させたいと思ひます」と論じて、西洋文明の波及への意欲をみせている。⁽¹¹⁰⁾

修身要領の解説も試みており、明治三十三年四月の『慶應義塾学報』では、「修身要領に就て(一)」と題して独立自尊について論じ、「コーペルニクス諸説の真実であると憚る所なく公言」し、異端者として処刑されたジョルダーノ・ブルーノを挙げて、「一片の独立自尊の心は遂に援く可らず生命を擲ても其理を主張した」と賞讃している。⁽¹¹¹⁾同年九月の同誌には、「文藝の嗜」と題する論説を寄せ、同要領の文藝の嗜みが品性を高くするとの一節を引いて、「真成に文藝美術を愛するの嗜は独立自尊の心を養ふに預りて大に力がある」と述べた。⁽¹¹²⁾

この間の明治三十三年六月の『慶應義塾学報』には、岡崎での演説筆記である「徳川家康と英米人種」で、「三河士女の中には簡易活発氣軽なること米国人の如き者もあらん充実堅固大丈夫を踏むこと英国人の如き者もあらん而も其旨味のあることは其是れアングロサクソンに等しと信ず」と述べて、家康や三河の精神と英米人との共通点を肯定的に論じている。⁽¹¹³⁾翌月の同誌では、「清醜分化」と題する文章で、「日本の売淫婦社会は彼の間違った孝貞論の結果として西洋諸国の売淫婦社会よりも玉石混淆の状態に於て在る……実業力に於ても兵力に於ても大英国が全世界に冠たるもの謂れなきに非ず」と英国を高く評価した。⁽¹¹⁴⁾明治三十四年五月の同誌には「根本的儉約論(慶應義塾学生諸君に告ぐ)」とする文章を寄せて、目先の儉約よりも「長久の策」として「西洋実理実学

を奨励するの大切なるは素より論ずるまでもない」と述べている。⁽¹⁵⁾ 明治三十五年三月の同誌には、「日英同盟と英文学」と題する文章を寄せ、「此度びの同盟の一事こそ好機会なれ此機に乗じて大に英文学の流行を来させたものである」と日英同盟を契機に英文学が広がることを期待している。⁽¹⁶⁾ 西洋文明、特に英米の文学や実学、文化の重要性を説くのが、一太郎の基本的姿勢である。

明治三十六年一月の『慶應義塾学報』には「学者と実業家との同心協力」という文章で、「学実調和学者と実業者とをして国の独立自尊の為に同心協力せしめん其ために我当慶應義塾の士が奮発せんことを私は深く希望するので御坐います」と述べ、⁽¹⁷⁾ 同年七月の同誌では「英米の気風と我慶應義塾」と題して、「バランス ホウィールたるサウンド コンモンセンスを第一とし学問を第二とするアングロサクソン流義は蓋し我慶應義塾の大主意であらうと私は信じるので御坐います」と論じて、アングロサクソンの精神と慶應義塾の気風との共通点を強調している。⁽¹⁸⁾ 明治三十七年一月の同誌では、「慶應義塾の進運を祝す」とする文章で、「私は昨年十二月の十二日に慶應義塾出身の古い方々を宅へ御招き申しまして粗末の夕食を差上げました……平等的に談笑したるは主人の深く感謝する所で御座います、畢竟このデモクラチックスピリットは塾の気風であらうと考へます」と語った。⁽¹⁹⁾ 日本の武士精神や慶應義塾の気風が英米のそれに通じるものがあると、一太郎は強調した。

明治三十七年二月に日露戦争が開戦すると、同年六月の『慶應義塾学報』に「乱に治を忘る、勿れ」と題する文章を掲載し、戦時であるからこそ、「殖産興業通商貿易」を盛んにして、実業を伸張させるという「治世に処する覚悟を忘れるな」と説き、⁽²⁰⁾ 同年七月の『中央公論』にも同タイトルのエッセイを寄せて、日露戦争は「排外専横主義に対する門戸開放自由競争主義の争」であるため、「実業的進取の観念」を忘れてはならないと強調した。⁽²¹⁾ この間、明治三十四年二月には福沢が死去しており、今後の慶應義塾を担っていかねばならないという自覚が、こうしたさかな一太郎の文筆活動を支えたにちがいない。

六、むすびに代えて——慶應義塾社頭として

明治四十年十二月、第三代慶應義塾社頭となると、一太郎は慶應義塾および福沢家を代表するかたちで、多くの文章を『慶應義塾学報』や『三田評論』などに発表していく。明治四十一年八月に『実業之世界』に掲載された「今若し父（故福沢大先生）が在世ならば如何なる言行を為すか」では、「福沢の長子丈けに比較的他の方より多く且精しく知つて居る」として、「不品行を一番八釜しく云ふだろう」「元氣恢復を鼓吹するでせう」「天下の青年挙げて実業界に入るを八釜しく云ふでせう」「益々独立自尊を鼓吹するでせう」「金の事に就ても説き立てるでせう」と述べて、福沢の代弁者をもつて自負している。⁽¹²⁾ただ、代弁者たろうとすることには相当の重圧があったように、明治四十二年三月に『教育界』に発表した「故福沢先生回顧」では、「私は文章といひ弁舌といひ、何一つ父に及ぶものはありませんから、父の遺して置きました教訓などに就いて、彼之と社会に発表するのが恐ろしい御座います」と心情を吐露し、父の思想や言論についてはその著作をみてほしいとした上で、「父の主義は誰人も御存じの独立自尊主義でありまして、これは父の一生を通じて変へず枉げなかつたところ」だと指摘し、「父を思ふの情は年を経るに従て、層一層増して来るので御座ます」と記している。⁽¹³⁾重圧を感じながらも、父を慕う気持ちに支えられて、一太郎はその言論活動を展開していった。

明治四十五年五月の『慶應義塾学報』には「実学のツレーニングと人事の実際（義塾商工学校卒業生諸君に告ぐ）」と題する文章を寄せ、慶應義塾商工学校卒業生に「あなた方がサイアンス即ち西洋実学のツレーニングに抛て、信を重じなければ成らない、正直でなければ成らない」と論じている。⁽¹⁴⁾同年七月の同誌では、「慶應義塾卒業生諸君に告ぐ」と題する訓示筆記で、「諸君は、謂はゞ吾々の学校を一つの店とすれば、レーテストメークの品である、最新の作品である、慶應義塾の新に咲かせた花である、此花が社会に出て、さうして大に活動さ

れるといふ事は、吾々の誠に喜ばしく思ふ所である」と呼びかけている⁽¹²⁵⁾。さらに大正二年（一九一三）十月の『慶應義塾学報』では、「社会に於ける礼儀」と題する文章で、「カーテンジーとシンセリチーとを失ふに至ては、社会は淫猥に陥らざるを得ない」と警鐘を鳴らしている⁽¹²⁶⁾。この時期、一太郎が特に意識していたのは実学と品格の重要性であった。

大正十一年十二月八日の慶應義塾長就任を受けて、大正十一年十二月二十四日付の『三田新聞』に掲載されたインタビューでも、記者に「塾生に対する私の訓話と云へば一口に云ふと父の教へをその儘遵奉して貰ひたひといふことである」と語り、「ゼントルマン・ファーストを第一の主義として決してファツションにのみ拘泥してはいけない」と強調している⁽¹²⁸⁾。翌年二月の『三田評論』に掲載された「慶應義塾々生に告ぐ」においては、「我慶應義塾の教育の目的は独立自尊の人を造るに在るので御座います」と述べた上で、幼稚舎から大学へと、次第に教職員の干渉を弱め、「結局の目的は無干渉自由放任、己れの行動に対するカンセクウェンスは己れで引受ける社会の一員たるやうに育て上げやうとするのである」と論じた⁽¹²⁹⁾。塾長退任後の昭和二年五月二十八日付の『三田新聞』では、義塾は英語の学校でサイエンスを土台としているが、日本が英米に近づくとそれだけでは足りず、その文学を通じて人情風俗を知り、「英米のアイデアリズムを大いに学んで欲しい」と呼びかけている⁽¹³⁰⁾。

一太郎の文章には、英単語が頻出すること、英米文学や実学の必要性を強調すること、西洋文明、とりわけ英米文明やその精神を高く評価し、日本の伝統精神や慶應義塾の気風との共通点を読み取ること、福沢の逸話や精神がよく盛り込まれること、独立自尊の精神や紳士的態度、品格の重要性を強調することなどが、特徴である。

周囲からの評価についても、一瞥しておきたい。昭和十三年六月二十四日に一太郎が没した際の慶應義塾長・小泉信三は、「青年時代米国で勉強せられたので、英語の発音は殊に流暢で正確であつた。またよく散歩に出られる、その散歩の行先は日本橋の丸善であつたといふことも聞いている」と述べている⁽¹³²⁾。孫の小山五郎は、一周

忌を期に『祖父福沢一太郎の想出』を出版し、その中で、妹の志立タキも、「兄上の英語の発音がきれいで、文法の正しいのにはいつも感心していました……私の若い間は知識の広い英語、英文学に精通した方と思ふばかりでありました」と述懐する。⁽¹³³⁾ 娘婿の小山完吾は一太郎の読書について、進化論、生物学、医学、日本文学、英米文学、特にシェークスピア、バイロンなどに及んだとして、「新刊物が外国から到着の場合など、如何にも楽しさうに目録を見たり、頁を翻へしたりして悦に入り、挙句の果には本を撫でまわして喜んだものである」と回想している。⁽¹³⁴⁾ 息子の福沢宏も、「父は実に本の好きな人で沢山の本を集め読みつづけ勉強をしてゐた。二階が本でつぶれると母がこぼした程の本の中で一日一人読みつづけてゐた」と語っている。⁽¹³⁵⁾ こうした語学力や幅広い読書に支えられて、一太郎の言論活動は展開されたわけである。

福沢諭吉の長男、という立場は、一太郎にさまざまなプレッシャーを与えたにちがいない。生来の臆病な性格もあり、福沢からは心配されてばかりで、留学中もその性格や飲酒、信仰、結婚、健康、そして勉強の方向性をめぐって、父を悩ませることが多かった。そんななかで、一太郎自身、特定の大学を卒業することはできなかったものの、文学と英語を身につけ、帰国後、とりわけ父が倒れた後はその知見を生かして文学や実学、西欧文明の波及、デモクラシーや独立自尊の精神の涵養、父の精神の継承に努め、懸命に慶應義塾を支えた。一太郎が、その立場を踏まえて義塾の理念と目標を示し続けたことは、鎌田栄吉、林毅陸、そして小泉信三という、有能な塾長に恵まれたことと相まって、福沢亡き後の義塾の発展に少なからぬ貢献をしたものと思われる。実際、林は一太郎について、「一意唯だ塾の社頭として大先生の偉業を守るに努め、其全精神は慶應義塾の上に傾注せられてゐた」と述べた上で、塾長在任中、「時々氏を訪ふて塾務を報告し其指導を仰いだのであるが、氏は常に喜んで報告を聴き、其の関心の甚だ深きことを示されてゐた。然かも局に当る者を信頼せられ、唯だ好意と同情とを以て、支持と奨励とを与へられた。今日に於ても予の感謝に堪えぬ処である」と述懐している。⁽¹³⁶⁾ 小泉も、「一太

郎先生の寸時もお忘れにならなかったことは、福沢諭吉先生の志を継ぎ、福沢諭吉先生の主義を固く守る、終始此の一事であつたやうに私共は感じます……故社頭に於て私の見ましたものは、実に一少年にも似た所の孝子としての一太郎先生でありました」と評し、塾長として義塾について報告すると、晩年の一太郎は「皆さん御尽力をして下さつて有難い、それに引代へ自分は病氣の為に一向義塾の為に働くことが出来ない、洵に申訳ないといふやうな言葉が屢々ありました」といふ。⁽¹³⁷⁾

米国留学の間、一太郎は、その基礎となる語学力を磨き、読書を重ね、西洋理解を深め、そして何より、遠隔地から書簡を通して頻々と寄せられる父の愛を受けた。⁽¹³⁸⁾その意味で、一太郎にとつての留学は、その生涯にも、また慶應義塾の歴史にも、少なからぬ影響を与えたといつてよからう。

- (1) 「福沢一太郎」(慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第五卷、岩波書店、平成一三年)、三七九頁。
- (2) 拙稿「福沢捨次郎の米国留学について―マサチューセツツ工科大学所蔵資料から」(『福沢手帖』第一六三号、平成二六年二月)、一三―二二頁。
- (3) 「一太郎と捨次郎の留学」(慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第四卷、岩波書店、平成一三年)、三五二頁、前掲「福沢一太郎」(前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷)、三七九頁、Helen Ballhatchet, "Fukuzawa Yukichi as a father: translations of letters written to his two eldest sons while they were in the United States, 1883-1888", *The Hyoshi review of English studies*, No.62 (March 2013), p.4.
- (4) 前掲「福沢一太郎」(前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷)、三七九―三八〇頁、慶應義塾編『慶應義塾百年史』中巻(前)(慶應義塾、昭和三五年)、五六二―五六三頁。
- (5) 『三田評論』(第四九二号、昭和一三年八月)、一一九頁。
- (6) 小山太輝「福沢一太郎」(『三田評論』第一二二二号、平成三〇年四月)、四四―四七頁。
- (7) 石河幹明『福沢諭吉伝』第四卷(岩波書店、昭和七年)、四五三―四七六頁。

- (8) 富田正文『考証 福沢諭吉』下 (岩波書店、平成三年)、六〇三—六一五頁。
- (9) 坂井達朗・松崎欽一「解題」(前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷)、三六九—三七二頁、寺崎修・西川俊作「解題」(前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷)、三九四—四〇一頁。桑原三三編著『福沢諭吉—留学した息子たちへの手紙』(はまの出版、平成元年)も、福沢が太郎・捨次郎に宛てた書簡四〇通を現代語訳し、そこに解説を加えており、福沢諭吉「愛児への手紙」(岩波書店、昭和二十八年)にも、両名宛福沢書簡一〇七通が収録され、小泉信三が解題を書いている。
- (10) 金文京「二子の帰朝二首」(『福沢手帖』第一八一号、令和元年六月)、二四—二八頁、同「太郎、捨次郎のアメリカ留学」(『福沢手帖』第一七二号、平成二十七年三月)、二八—三二頁。
- (11) 「カロザス」と「グロドマン」については、拙稿「慶應義塾初の外国人教師採用について—旧掛川藩主太田資美の事蹟」(『福沢手帖』第一一三号、平成一四年六月)、一—七頁、参照。
- (12) 一太郎が「シヨ」から受けた教育に関しては、白井堯子『福沢諭吉と宣教師たち—知られざる明治期の日英関係』(未來社、平成一一年)、七八—八一頁、参照。
- (13) 「福沢諭吉子女之伝」(慶應義塾編『福沢諭吉全集』別巻、岩波書店、昭和四六年)、一二二—一三六頁。
- (14) 慶應義塾編『福沢諭吉全集』第二〇巻 (岩波書店、昭和四六年)、六七—七七頁。
- (15) 福沢一太郎「ひゞのをしへ」掲載に就て(『少年』第二八号、明治三九年一月)、二—三頁。
- (16) 慶應義塾編『福沢諭吉全集』第一七巻 (岩波書店、昭和四六年)、四〇六—四〇七頁。
- (17) 西澤直子「福沢一太郎」(福沢諭吉事典編集委員会編『福沢諭吉事典』慶應義塾、平成二三年)、五六—六一頁。
- (18) 前掲『福沢諭吉全集』第一七巻、五五—五五三頁。この心得書については、前掲「太郎、捨次郎のアメリカ留学」、三〇頁、前掲『考証 福沢諭吉』下、六〇六—六〇七頁、も参照。
- (19) 慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第三巻 (岩波書店、平成一三年)、二九八頁。
- (20) 前掲『福沢諭吉書簡集』第三巻、二八九頁。
- (21) 前掲『福沢諭吉書簡集』第三巻、二九二頁。
- (22) 前掲「一太郎、捨次郎のアメリカ留学」、二八—三二頁。

- (23) 前掲「一太郎、捨次郎のアメリカ留学」、三一—三二頁。
- (24) 前掲『福沢諭吉書簡集』第三卷、二九九—三〇〇頁。
- (25) 前掲『福沢諭吉書簡集』第三卷、三〇二頁。
- (26) 前掲『福沢諭吉書簡集』第三卷、三一—三二頁。
- (27) 前掲『福沢諭吉書簡集』第三卷、三三頁。
- (28) 「福沢捨次郎米国行日記」(前掲『福沢諭吉全集』別巻)、二一六—二二七頁。
- (29) 前掲『福沢諭吉書簡集』第三卷、三一六頁。
- (30) 前掲『福沢諭吉書簡集』第三卷、三二六頁。
- (31) 前掲『福沢諭吉書簡集』第三卷、三三三—三三四頁。
- (32) 前掲「福沢捨次郎米国行日記」、二二四—二二五頁。
- (33) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、五頁。
- (34) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、九頁。
- (35) 『時事新報』明治一六年一〇月一日付社説として、「米国来信抜粹(鉄道ト仮名ノ事)」が掲載されているが、そこでは、鉄道の普及によって「有形ノ品物ヲ交通シテ物価ヲ平均スルノミナラズ無形ノ言語ヲモ運搬シテ其平均ヲ得セシムルモノ、如シ」として、方言が減少することを期待するとともに、仮名文字普及の必要性が説かれている。これが一太郎の記した「鉄道論」だと考えられ、現在、一太郎が原文を起草し、福沢が加筆したと思われる筆写原稿が残されている(「明治一六年一〇月一日時事新報社説 米国来信抜粹(鉄道ト仮名ノ事)」慶應義塾福沢研究センター蔵、受入番号・K00588)。
- (36) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、一六頁。
- (37) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、一九—二〇頁。
- (38) シモンズは、オランダ改革派の米国人医療宣教師で、福沢の腸チフスの治療をして以来、福沢と交遊が深く、明治一五年に帰国していた(前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、三四二頁)。留学中の一太郎とシモンズとの関係については、荒井保男『ドクトル・シモンズ—横浜医学の源流を求めて』(有隣堂、平成一六年)、二一六—二四〇頁、など

参照。ヨングハンスも来日経験のある米国人医師で、当時は米国に滞在しており、シモンズとともに両名の留学の後見人となった(前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、一四八頁)。ただ、ヨングハンスと一太郎はそりが合わず、一太郎が福沢に苦情を申し立てて、叱責されることもあった(前掲「解題」前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、四〇〇頁)。

(39) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、四〇—四二頁。

(40) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、四五—四八頁。

(41) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、六五頁。

(42) この点、およびオバーリン大学の特色に関しては、前掲『福沢諭吉と宣教師たち——知られざる明治期の日英関係』、三三—三九頁、参照。

(43) *Catalogue of the Officers and Students of Oberlin College, for the College Year 1883-4* (Chicago: The Blakely Marsh Printing Co. 1883), p.35.

(44) *Ibid.*, p.69.

(45) *Ibid.*, pp.56-72.

(46) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、七六—七七頁。

(47) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、七九—八〇頁。

(48) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、一〇—一頁。

(49) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、一一〇—一一九頁。明治一七年四月、岩崎清七は福沢の紹介状を持ってポーキプシーの「カッテイジ・グローヴ」という「準備学校」に兩名を訪ねたと述べている(岩崎清七「福沢一太郎先生に關して」小山五郎編『祖父福沢一太郎の想出』小山五郎、昭和一四年、一三三頁)。ここで入学準備を進めたものと思われるが、この学校について、詳しいことはわからない。

(50) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、一三一頁。

(51) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、一三九頁。

(52) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、一六二頁。

(53) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、一七三頁。

- (54) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、一七七頁。
- (55) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、一九三—一九四頁。
- (56) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、一九九—二〇三頁。
- (57) *The Cornell University Resister, 1884-85*, Ithaca, N.Y., p.33. コーネル大学の在籍記録については、コーネル大学 Division of Rare and Manuscript Collections のナタリー・ケルゼイ氏にご教示いただいた。感謝申し上げる次第である。
- (58) *Ibid.*, p.39.
- (59) *Ibid.*, p.5.
- (60) *Ibid.*, pp.73-78.
- (61) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、一二三頁。
- (62) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、二六〇頁。
- (63) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、二七〇頁。
- (64) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、二九一頁。
- (65) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、三〇三頁。
- (66) 前掲『福沢一太郎先生に關して』、一二二—一二五頁。
- (67) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、三二三頁。
- (68) 前掲『福沢一太郎先生に關して』、二四—二五頁。
- (69) 岩崎清七「洋行中の福沢社頭」(『三田評論』第五〇四号、昭和一四年八月)、八頁。
- (70) *The Cornell University Resister, 1885-86*, Ithaca, N.Y., *The Cornell University Resister, 1886-87*, Ithaca, N.Y., *The Cornell University Resister, 1887-88*, Ithaca, N.Y.
- (71) *The Ten-Year Book of Cornell University II 1868-1888* (Ithaca: Andrus and Church, 1888), p.100.
- (72) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、三三三—三三七頁。イーストマン・ビジネス・カレッジには、明治二〇年二月に渡米した福沢桃介も学んでいる(松崎欣一「福沢(岩崎)桃介」前掲『福沢諭吉事典』、五六五—五六六頁)。福沢

は同年四月二八日付の桃介宛書簡で、留学中に英語や鉄道について学ぶよう伝えている（前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、一八七—一八八頁）。

(73) イサカとポーキプシーは三〇〇キロ以上離れており、ポーキプシーからコーネル大学に通うのは不可能である。

(74) 前掲「一太郎と捨次郎の留学」、三五—二頁。

(75) 前掲『福沢諭吉書簡集』第四卷、三三〇頁。

(76) 前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、八頁。

(77) ポーキプシー公共図書館のシャモン・バトラー氏のご教示による。

(78) <https://www.lostcolleges.com/eastman-business-college>, accessed 4 December 2021.

(79) 前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、三七—三八頁。

(80) 前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、七七頁。

(81) 前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、八九—九〇頁。

(82) 前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、一〇二—一〇三頁。

(83) 前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、一一八、一五〇、一七〇頁。

(84) 前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、一八一、一八六、二二三—二二四、二二九頁。

(85) 前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、二三二—二三三頁。

(86) 一太郎は米国の女性との結婚話を持ち出して、将来の生計が立たないなどと、福沢から反対を受けたこともあった（前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、一七〇—一七三頁）。この結婚問題については、前掲「解題」（前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷）、三九八—三九九頁、小泉信三「解題」（前掲『愛児への手紙』）、二二八頁、金文京「塔ノ沢温泉での執筆と来客」（『福沢手帖』第一七九号、平成三〇年十二月）、二二—二三頁、前掲『考証 福沢諭吉』下、六一—六三頁、なども参照。母・錦は七月九日付の一太郎宛書簡で、福沢は「年は年にて、心配はよほどからだに障り候様に見うけ」られるとして、「おもへも別段親孝行を致せとは不申、只々心配をかけぬ様」と諭している（慶應義塾編『福沢諭吉全集』第一八卷、岩波書店、昭和四十六年、一二九頁）。

(87) 前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、三三三頁。

- (88) 前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、三六五頁。卒業証書をめぐる福沢と一太郎とのやりとりについては、前掲「解題」(前掲『愛児への手紙』、一二九頁、なども参照)。
- (89) 前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、二九一頁。
- (90) 前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、二九八頁。当時の一太郎とナツプとの関係については、土屋博政『ユニテリアンと福沢諭吉—Unitarian—自由キリスト教』(慶應義塾大学出版会、平成一六年)、七八—七九頁、参照。
- (91) 前掲「解題」(前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷)、四〇一頁。
- (92) 前掲「二子の帰朝二首」、二五頁。
- (93) 慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第六卷(岩波書店、平成一四年)、七二頁。
- (94) 前掲「二子の帰朝二首」、二四—二七頁。
- (95) 前掲「二子の帰朝二首」、二七—二八頁。
- (96) 「福沢諭吉関係新資料紹介」(『近代日本研究』第二三卷、平成一九年三月)、二五四頁。
- (97) 「日本商人の品位」(『時事新報』明治二〇年二月二六日付)。この社説の筆写原稿が、現存している(「福沢一太郎「日本商人の品位」」(『時事新報』明治二〇年二月二六日所載)「慶應義塾福沢研究センター蔵、受入番号・K00573)。
- (98) 「耶穌教を入れる、か仏法を改良するか」(『時事新報』明治二一年五月二八日付)。
- (99) 前掲「ユニテリアンと福沢諭吉—Unitarian—自由キリスト教」、八八—八九頁。
- (100) 前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、三一八頁。
- (101) 前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、三〇五頁。この一太郎の提案、および「耶穌教を入れる、か仏法を改良するか」については、前掲「ユニテリアンと福沢諭吉—Unitarian—自由キリスト教」、七九—九一頁、参照。
- (102) 前掲『福沢諭吉書簡集』第五卷、九〇頁。
- (103) 志立鉄次郎「清い心の持主」(前掲『祖父福沢一太郎の想出』、六頁。
- (104) シモンズの夫人はユニテリアンであり、一太郎はユニテリアンの人々と触れあう機会もあったのであろう(前掲『ユニテリアンと福沢諭吉—Unitarian—自由キリスト教』、八五頁)。

(105) 一太郎は帰国後もキリスト教への好意的態度を維持したようで、慶應義塾基督教青年会編『慶應義塾基督教青年会三〇年史』(慶應義塾基督教青年会、昭和四年)が刊行された際には、「慶應義塾基督教青年会三〇年史の発刊を祝す」と題する祝辞を寄せ、「現思想界の複雑を極めてある時に当つては、日本在来の宗教を研究することも必要であらうが、欧米諸国人の思想の根底をなしてゐる基督教について知るといふことは非常に必要なことである」と述べている(一頁)。なお、岩崎はコーネル大学在学中、日曜日にはキリスト教の教会の礼拝に参加して説教を聴くという日々を、二年続け、周囲から洗礼を受けた方がよいと勧められて、一太郎に相談したところ、「毎週日曜に君がチャアチで聴く説法の全部を信用する事が出来て、バイブルの全部を承認する事が出来たら、洗礼を受く可きである。若し疑点を持ち難解の点がありとすれば、氷解する迄待つ可きである」といわれ、結局洗礼を受けなかったという(前掲「福沢一太郎先生に關して」、二六―二七頁)。一太郎自身、キリスト教には感化を受けつつも、説教や聖書のどこかに疑点を感じて、洗礼を受けるにはいたらなかったのかもしれない。ただ、キリスト教、特にユニテリアンの距離を取らざる得ない複雑な事情もあった。本文の通り、一太郎はユニテリアンに親近感を持っており、ナップとも信頼関係を築いたものの、福沢はのちにナップと決裂したため、土屋博政は、「その結果、彼(一太郎―引用者)は最後の最後まで宗教的に帰属できるものを持ってないままであったようだ」と指摘する(前掲『ユニテリアンと福沢諭吉―Unitarian Ⅱ 自由キリスト教』、一八八―一九〇頁)。ただ、武田清子によると、一太郎が妹の志立タキにあてたらしい遺書には、葬儀はキリスト教式で行つてほしいとひそかに記されていたという(武田清子『人間觀の相剋―近代日本の思想とキリスト教』弘文堂、昭和三四年、三五頁)。

(106) 「帰朝記事 福沢一太郎氏英文の翻訳」(『時事新報』明治二十一年九月一三日―一五日、一七日付)。

(107) 前掲「福沢一太郎」(前掲『福沢諭吉事典』、五六一頁、前掲『慶應義塾百年史』中巻(前)、八八八―八八九頁。時事新報の原稿用紙に一太郎が起草し、福沢が筆を加えたものが多く残されており、そのうちいくつかは紙面に掲載されている(慶應義塾福沢研究センター編『マイクロフィルム版福沢関係文書 福沢諭吉と慶應義塾(収録文書目録第四分冊・福沢諭吉関係資料(一))』雄松堂、平成一〇年、F09-AD16-01―F09-AD20)。

(108) 福沢一太郎「実学者の苦心談(慶應義塾学生諸君に告ぐ)」(『慶應義塾學報』第二二号、明治三二年二月)、五五頁。

- (109) 福沢一太郎「Atsumori, Prince of the Taira: A Japanese Romance」(『慶應義塾学報』第十二号、明治三十一年二月)、一—八頁。
- (110) 福沢一太郎「西洋文明の泉源」(『慶應義塾学報』第二十三号、明治三十三年一月)、四六頁。
- (111) 福沢一太郎「修身要領に就て(一)」(『慶應義塾学報』第二十六号、明治三十三年四月)、六頁。明治三十三年には、共著で『修身要領講演』と題する解説書も刊行している(福沢一太郎等述『修身要領講演』慶應義塾、明治三十三年)。一太郎の修身要領への関わりについては、前掲小山太輝「福沢一太郎」、四七頁、前掲『慶應義塾百年史』中巻(前)、四五—四九五頁など、参照。
- (112) 福沢一太郎「文藝の嗜」(『慶應義塾学報』第三十一号、明治三十三年九月)、四頁。
- (113) 福沢一太郎「徳川家康と英米人種」(『慶應義塾学報』第二十八号、明治三十三年六月)、九頁。
- (114) 福沢一太郎「清醒分化」(『慶應義塾学報』第二十九号、明治三十三年七月)、一八頁。
- (115) 福沢一太郎「根本的儉約論(慶應義塾学生諸君に告ぐ)」(『慶應義塾学報』第四〇号、明治三十四年五月)、六一—七頁。
- (116) 福沢一太郎「日英同盟と英文学」(『慶應義塾学報』第五〇号、明治三十五年三月)、二頁。
- (117) 福沢一太郎「学者と実業家との同心協力」(『慶應義塾学報』第六〇号、明治三十六年一月)、一—三頁。
- (118) 福沢一太郎「英米の気風と我慶應義塾」(『慶應義塾学報』第六十七号、明治三十六年七月)、四頁。
- (119) 福沢一太郎「慶應義塾の進運を祝す」(『慶應義塾学報』第七十三号、明治三十七年一月)、一頁。この論説については、前掲『慶應義塾百年史』中巻(前)、六七九、七三八頁、も参照。
- (120) 福沢一太郎「乱に治を忘る、勿れ」(『慶應義塾学報』第七十八号、明治三十七年六月)、一頁。
- (121) 福沢一太郎「乱に治を忘る、勿れ」(『中央公論』第一九卷六号、明治三十七年七月)、五四頁。
- (122) 福沢一太郎「今若し父(故福沢大先生)が在世ならば如何なる言行を為すか」(『実業之世界』第五卷四号、明治四十一年八月)、四〇—四四頁。
- (123) 福沢一太郎「故福沢先生回顧」(『教育界』第八卷五号、明治四十二年三月)、八八頁。
- (124) 福沢一太郎「実学のツレーニングと人事の実際(義塾商工学校卒業生に告ぐ)」(『慶應義塾学報』第一七八号、

明治四五年五月)、六頁。

(125) 福沢一太郎「慶應義塾卒業生諸君に告ぐ」(『慶應義塾學報』第一八〇号、明治四五年七月)、一頁。

(126) 福沢一太郎「社会に於ける礼儀」(『慶應義塾學報』第一九五号、大正二年一〇月)、五頁。このほか、大正四年に商工学校創立一〇年記念会が開催された際には、「蒙昧俗社会の蒙を開て文明の進歩に貢献する」ことと「西洋実学の全体の学問に対する心掛を忘れずして文明紳士の品位、威厳を保つ」よう呼びかけた一太郎の祝辞の下書きと思われるものが残されている(『慶應義塾福沢研究センター蔵、受入番号・遺品88133』)。

(127) 大正一一年六月に塾長の鎌田栄吉が文部大臣に就任し、後任として林毅陸が擬せられたものの、林は当時衆議院議員であったため、政界との関係を清算して適任者となる翌年一月まで、一太郎が塾長を兼務した。詳しくは、慶應義塾編『慶應義塾百年史』中巻(後)(『慶應義塾、昭和三九年)、三十四、八九一—一〇五頁、参照。

(128) 『三田新聞』大正一一年二月二十四日付。

(129) 福沢一太郎「慶應義塾々生に告ぐ」(『三田評論』第三〇七号、大正一二年二月)、四頁。

(130) 『三田新聞』昭和二年五月二十八日付。

(131) 「故福沢社頭葬儀記事」(『三田評論』第四九二号、昭和一三年八月)、四頁。先述のように一太郎はキリスト教式の葬儀を望んだようだが、実際の告別式は仏式で、慶應義塾大講堂において執り行われ、「一乗院釈大成明朗居士」の法名を受けて、多摩墓地に埋葬された(同前、四一—六頁。一太郎の葬儀については、慶應義塾福沢研究センターに所蔵されている「昭和一三年六月 社頭福沢一太郎先生葬儀関係書類」と題する大部の簿冊に詳細がまとめられている(受入番号・K92027-19)。

(132) 小泉信三「福沢社頭」(『三田評論』第四九二号、昭和一三年八月)、一頁。

(133) 志立タキ「兄上を想ふ」(前掲『祖父福沢一太郎の想出』、一〇—一一頁。

(134) 小山完吾「至孝至誠の人」(前掲『祖父福沢一太郎の想出』、一七—一八頁。

(135) 福沢宏「父をしのびて」(前掲『祖父福沢一太郎の想出』、三六頁。一太郎が稀代の読書家であったことは、慶應義塾福沢研究センター編『福沢一太郎蔵書目録』(『慶應義塾福沢研究センター』平成一〇年)に収録されている膨大な蔵書(洋書七〇四冊、和漢書三一四冊)によっても、うかがい知ることができる。

(136) 林毅陸「福沢社頭を憶ふ」(『三田評論』第四九二号、昭和一三年八月)、一七頁。

(137) 小泉信三「福沢一太郎先生を憶ふ——昭和一四年六月二三日故福沢一太郎先生一周忌記念講話」(『三田評論』第五〇四号、昭和一四年八月)、三一—四頁。

(138) 福沢は『福翁自伝』のなかで、「親子の間は愛情一偏で何ほど年を取ても互に理屈らしい議論は無用の沙汰である。是れは私も妻も全く同説で親子の間を成る丈け離れぬやうにする計り」だとして、両名の留学中は米国の郵便船が来るたびに書簡を送り、その数は六年間で「三百何十通」に及んだと回想している。このうち、現存する留学中の一太郎・捨次郎両名宛、また一太郎宛、捨次郎宛の書簡は、計一二通である(松沢弘陽校注『福沢論吉集 新古典文学大系明治編一〇』岩波書店、平成二三年、三四四頁)。